

飲酒運転・事故の心理学（3）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 吉田, 信彌 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/535

事故の心理学

(3)

吉田信彌

今年は飲酒運転の取り締まりが格段に強化された年でした。その結果、捕まった人が増えたのは当然ですが、その中に警察官まで含まれていたのは、われわれにとって驚きでした。

10月の時点で飲酒運転で捕まった警察関係者の数が昨年を上回ったとの記事(「日経新聞」10月6日付)がありました。それを読んでショックだったのは、昨年の25人という数値でした。25人は多いと思います。今年は

何人になるのでしょうか。プロ意識に欠けるような組織の不祥事があいつぐ年でしたが、警察もその例外ではなかったわけです。

飲酒運転がいけないこと、そして危険なこととは誰もわかっています。いちはんわかってはいるはずの「警察官がなぜ」というのが一般の疑問であり、不信感をいだく点です。しかし、実験という手段で飲酒運転を免許試験場内で観察した私からすると、警察官が飲酒運

飲酒運転



転をしてしまう事情の一端が理解できるような気がします。

初めて飲酒運転をする警察官を考えましょう。おどおどと運転しだした彼(または彼女)はやが

て思うはずですが、

「あれ、いけるじゃないか。運転して頭がくらくらするわけでもないし、ハンドルがふらふらなんてしていない。大丈夫、運転できる。飲酒運

転は危険と聞いていたが、なんだ、車は動かせるし、ちゃんと進むじゃないか。事故なんか起こさずなんとかいける。いままで見聞きした酷い事故は自分より酔った連中が起こしたのだから……」と、こんな風ではな

同じような変な自信をもっているのではないでしようか。

ところが、その「大丈夫」と思う判断こそが飲酒運転の落とし穴です。飲酒するとそのように自分の状態がわからなくなる、というのが私たちの

行動の結果についての情報が入りにくい状態になると私たちは推測しています。そのために自分の行動を客観視できない無自覚状態になります。その自覚がないから常習者にもなりやすいのです。

さらに、飲酒運転は眠る行動の結果についての情報の福岡や、2005年5月の宮城県多賀城)には同乗者がいました。その同乗者は後部座席で眠っていました。

もし同乗者が真の友人ならば、運転者を助けるために助手席に乗りこんで一緒に前方の注視にあたり、このトラブルは厄介で尾を引きそうです。

「大丈夫」と思う判断に落とし穴

いでしょうか。

飲酒運転は危ない、いけない、と言いつつ聞かされているだけに、実際に運転したときに「大丈夫」という意外な安心感を飲酒運転の警察官がもって不思議ではありませ

実験の結論の一つです。自分で大丈夫と思っても実際は目ごころの運転とは違ふし、エラーも出ます。しかし、酔うとそれに気づかないのです。通常は自分の行動の結果を顧みながら行動を調整するのに、飲酒すると

くなります。睡眠と戦いつつ、自分の状態がわからないまま安全に運転するのは至難の業です。事故だけでなく、警察の検問も避けなければなりません。

同乗者も重く罰すべきと法律改正はされるようですが、そうなるまで飲酒

自分の行動の情報が戻ってこない。睡眠が襲う。交友も面倒になりそう。飲酒運転はリスクが大きすぎます。しらふでも無事故・無違反の安全運転は、そう易しくはないことを思い起こしていただきたいと思います。(東北学院大学教授)